富田林市遺跡調査会報告 4

甘南備遺跡

1997. 3

富田林市遺跡調査会

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。その中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡も多く存在することから古くから人々の営みが行われていたことがわかっています。一方、市南部は起伏に富み今も自然が残る丘陵地で、いくつかの遺跡の存在は知られていましたが、これまで大きな発掘調査も行われておらず、その地域性についてはあまりわかっていませんでした。

本書は、市道甘南備１号線の歩道設置に伴い平成8年度に実施しました、甘南備遺跡発掘調査の報告書です。

今回の調査では、縄文時代から鎌倉時代という幅広い時代の土器が出土しました。この成果が地域の歴史を解明するきっかけとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成９年３月

富田林市教育委員会
教育長　清　水　冨　夫

例　　言

１．本書は「市道甘南備１号線歩道設置」にともない富田林市遺跡調査会が平成８年度に緊急発掘調査を行った甘南備遺跡の調査概要である。

２．調査は平方扶左子を担当者とし、現地調査は平成８年11月13日から12月９日にかけて実施し、現地調査後に内業調査を行い、本書の刊行をもって終了した。

３．本書の執筆・編集は平方扶左子が行った。

４．調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の方々に協力を得た。
秋山敦子、岩井節子、岩瀬訓子、楠木理恵、大西常春、小田信代、木村満、佐藤三和子、瀬戸直子、中野創、西野繁太郎、原田亮子、米谷章、前野美智子、薮野勝久、山本節子、山本雅徳、吉田正春

５．出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

はじめに
例言
Ⅰ　調査にいたる経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の方法 …… 2
Ⅳ　基本層序 …… 2
Ⅴ　遺構 …… 3
　Ⅰ区 …… 3
　Ⅱ区 …… 6
　Ⅲ区 …… 6
　Ⅳ区 …… 6
　Ⅴ区 …… 7
Ⅵ　焼成遺構 …… 7
Ⅶ　出土遺物 …… 8
　縄文土器 …… 8
　中世の遺物 …… 9
Ⅷ　まとめ …… 11

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　調査区配置図 …… 2
第３図　Ⅰ区遺構平面図 …… 4
第４図　Ⅱ～Ⅴ区遺構平面図 …… 5
第５図　錦聖遺跡平面図 …… 7
第６図　錦聖遺跡出土物 …… 8
第７図　縄文土器 …… 8
第８図　溝１出土遺物 …… 10
第９図　出土遺物 …… 11

Ⅰ　調査に至る経過

甘南備遺跡は、市内の南東部に位置し、その規模は、南北約400m、東西約300mにおよぶ。遺跡の内容については、分布調査で縄文時代から平安時代までの遺物が採集されていたが、発掘調査は行われておらず、遺跡の性格などについては不明であった。

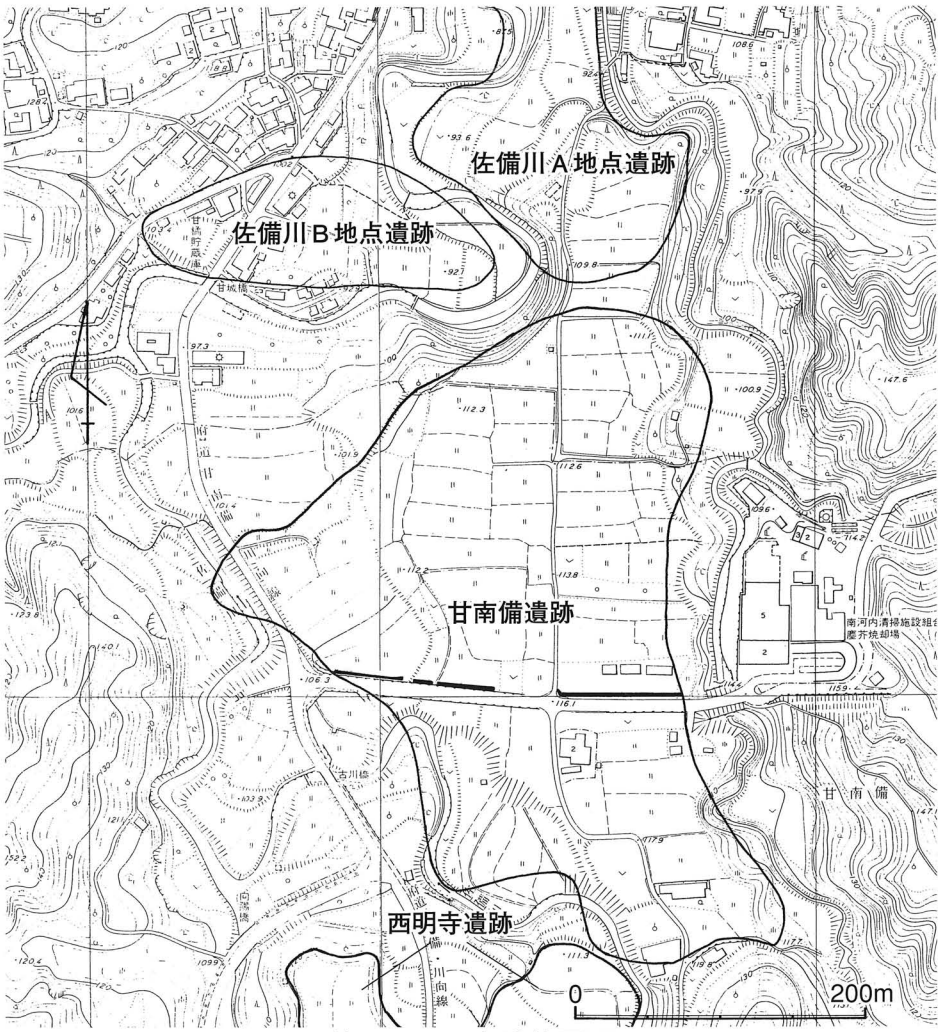
今回、南河内清掃施設組合塵芥焼却場に通じる東西の市道の北側に歩道を設置する事になり、事前調査を行った。調査は歩道が設置される６枚の水田に東西２m、南北１mの調査区をそれぞれ３～４箇所設定した。その結果、５枚の水田でピットなどの遺構が確認された。このため、遺構の確認できた水田の歩道設置部分について調査を行うことになった。

調査は平方扶左子を担当者とし、平成８年11月13日から12月９日にかけて実施した。

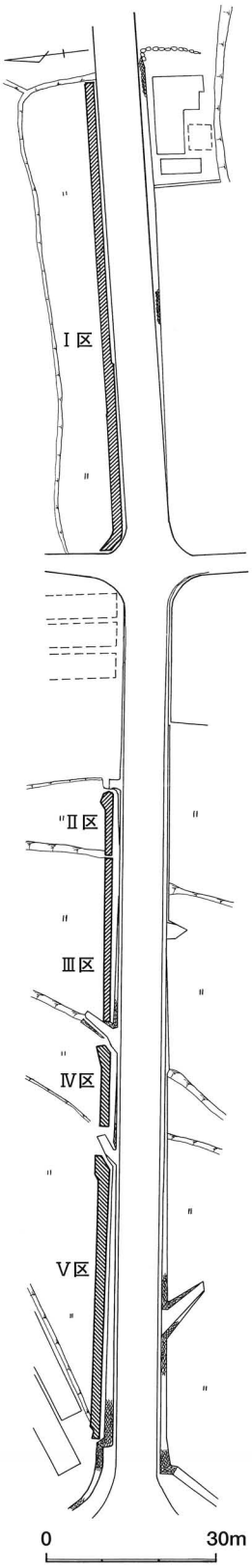
Ⅱ　位置と環境（第１図）

甘南備遺跡は佐備川の東岸の中位段丘上に位置する。佐備川は富田林市の中央を流れる石川の支流であり、流域には、石川ほどではないものの、遺跡が集中する地域である。

石川との合流点付近の西岸には西板持遺跡がある。ここで注目されるのは佐備川の氾濫層から縄文時代後期の土器群が出土していることで、上流にこの時期の集落があったことを示唆するものといえる。西板持遺跡の南西にある丘陵上には弥生時代後期から古墳時代にかけての高地性集落である彼方遺跡がある。一方、合流点の東岸には板持丸山古墳、板持古墳群といった古墳が点在する。古墳の時期は前期から後期まであり、同じような様相をもつ東側の西大寺山古墳群や南東の寛弘寺古



第１図　調査地位置図



第２図　調査区配置図

墳群との関係が注目される。古墳群の南には柿ヶ坪遺跡がある。合流点から少し遡ると佐備川西岸遺跡、岸之本遺跡、岸之本南遺跡などの遺物散布地が点在し、そのさらに上流部分に甘南備遺跡が位置している。遺跡の南側には平成６年度に新たに発見された西明寺遺跡があり、奈良時代から平安時代にかけての建物跡などが見つかっている。佐備川の西方には嶽山がそびえ、山頂には南北朝時代から戦国時代にかけての山城である嶽山城跡、奈良時代に創建された龍泉寺がある。

Ⅲ　調査の方法（第２図）

現況は水田で、各水田間で高低差があることから、水田ごとに約1.8m幅の東西に長い調査区を設定し、東から順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区とした。調査は、耕作面を機械で除去した後、人力で掘削、精査を実施した。

Ⅳ　基　本　層　序

調査地の全長は約400m、高低差は約５mあり、各調査区で堆積の状況は異なる。

Ⅰ区は、調査区の東端と西端で現況の耕作面の下に旧耕作面が１面確認できるが、ほとんどの部分が現況の耕作面の下にもう１面耕作面があり、これは西側の第３耕作面と同じ堆積である。ただ、この耕作面は約1.6m分しか確認できない。堆積の状況からこの耕作面が東から西に傾斜しており、現況の耕作面を造る際に削平され2/3で確認でき、最大で約0.6mの厚さがある。この下で地山が確認できる。

Ⅲ区は、現況の耕作面の下に最大で４面の耕作面が確認でき、その下に第５耕作面を造る際に行われた整地層が堆積している。この整地層は３層に分層できるが、上２層につちえは上層に堆積する。この整地層の下が地山である。東側については現況の耕作面直下が地山である。

Ⅳ区では現況の耕作面の下に濁灰褐色混礫土の層がある。この層もⅢ区で見られる整地層と同じように現況の耕作面を１枚にするために行った整地層と考えられ、上の水田になる東側にはこの層がみられない。この下には西側で計３面、東側で１面の耕作面が確認できる。西側の耕作面は整地層直下の第２耕作面はほぼ水平であるが、この下にある第３・４耕作面は地山に沿って東から西へ緩やかに傾斜する。第３・４耕作面の堆積は途中でなくなっており、第

２耕作面を造る際に削平されたものと考えられる。これらの耕作面の直下が地山である。

V区では２面の耕作面があり、直下で地山となる。ただし、東側部分については下層の耕作面がなく、現在の耕作面直下が地山となる。

これらの堆積状況から、Ⅰ区とⅤ区については元々から地山が水平だったのに対し、Ⅱ～Ⅳ区については斜面地だったところを水田化の段階で整地を行っていることが分かる。

今回の調査で検出した遺構はすべて地山面で検出した。

Ⅴ　遺　構（第３・４図）

今回の調査では、柱列２、溝７、土坑11、ピット77を検出した。以下、調査区ごとに述べることにする。

Ⅰ区　柱列２、溝５、土坑５、ピット40を検出した。調査面積が広いこともあるが、最も多くの遺構を確認している。

柱列１

調査区の中央からやや東よりの地点で東西３間分を確認した。各ピットの間隔は、1.8～２mで、東西にはこれ以上伸びないが、南北方向については細い調査区のためどちらに伸びるかについては不明である。ピットは直径0.3mの円形で、深さは約0.2mとやや浅い。柱の痕跡は残っていなかった。埋土は濁灰黄色粘質土で、土師器片が出土している。

柱列２

調査区の中央からやや東よりの地点で東西３間分を確認した。各ピットの間隔は２～2.3mで、東西にはこれ以上伸びないが、南北方向については不明である。調査区の北壁の際で検出されているため、ピットの正確な形状を知ることはできないが、0.4m程度の円形、または隅丸方形と思われ、深さは0.3～0.4mである。柱の痕跡は残っていなかったが、ピットの底を円形に掘り窪めているものがあり、直系0.2mの柱が立てられていたと考えられる。埋土は濁灰黄色粘質土で、土師器、瓦器が出土している。

溝１

調査区中央で検出した南北方向の溝である。幅は北側で1.9mあるが、南側では2.2mに広がっている。深さは0.36mで、溝の広がる南西部分ではやや深くなっている。埋土は濁茶褐色粘質土で、縄文土器が出土している。

溝２

調査区中央で検出した幅が3.2mの南北方向の溝で、深さは0.18mと浅い。遺構内からは約0.2～0.3mの石が多量に出土しているが、遺物が石に挟まった状態で出土していることから、廃棄したものと考えられる。埋土は濁灰黄色粘質土で、土師質土器の羽釜と瓦器椀が多量に出土している。遺構の底面でピットが９個検出されている。

溝３

調査区西側で検出した深さ0.1mの溝である。南東から北西に向いていた溝が調査区内で北へ折れ曲がっている。埋土は濁灰黄色粘質土で、須恵器、土師質土器、瓦器が出土している。遺構の底面でピット５つ、土坑１基を検出した。

溝4

調査区西側で検出した南北方向の溝で幅は0.63mである。深さは0.22mで、底面は南から北へわずかに傾斜している。埋土は濁灰黄色砂質土で、瓦器の小片が出土している。

溝5

調査区西側で検出した南北方向の溝で、溝4とほぼ並行している。幅は0.8m、深さは0.22mで、底面は南から北へ傾斜している。埋土は濁灰黄色砂質土で、土師器が出土している。

土坑・ピット

土坑とピットはトレンチの中央、溝2と溝3の間にそのほとんどが集中している。また、溝2、溝3の底面にはそれ以前のピットや土坑が検出されている。埋土にはいくつかの種類があるが、出土する遺物の時期にあまり大きな差はない。また、遺構の埋土が異なる溝2とピット23の遺物で接合するものも見られる。ただし、溝1と同じ濁茶褐色粘質土を埋土とする遺構については溝1からの出土した縄文土器以外にはなく、縄文時代の遺構の可能性が考えられる。遺構の規模については表1・2を参照されたい。

Ⅱ区

調査区東端は基本層序の項で述べたように地山が削平されているため遺構は確認できない。ピット44以外は地山が平坦になる調査区西端で検出している。埋土はすべて地山直上に堆積している濁茶褐色粘質土にマンガンが混入したものである。遺物は出土していない。

Ⅲ区

溝6

調査区西側で検出した幅0.65mの東西方向の溝で、13.4m分確認できた。深さは約0.1mと非常に浅く、底面は東から西へ傾斜している。埋土は濁灰褐色粘質土で土師器、須恵器、サヌカイトが少量出土している。

ピット・土坑

ほとんどが調査区の西側にあるが、地山が削平されている東側でも土坑が検出されている。また、溝6の底面にもピットを検出した。土坑7・8では多量の焼土塊が出土している。

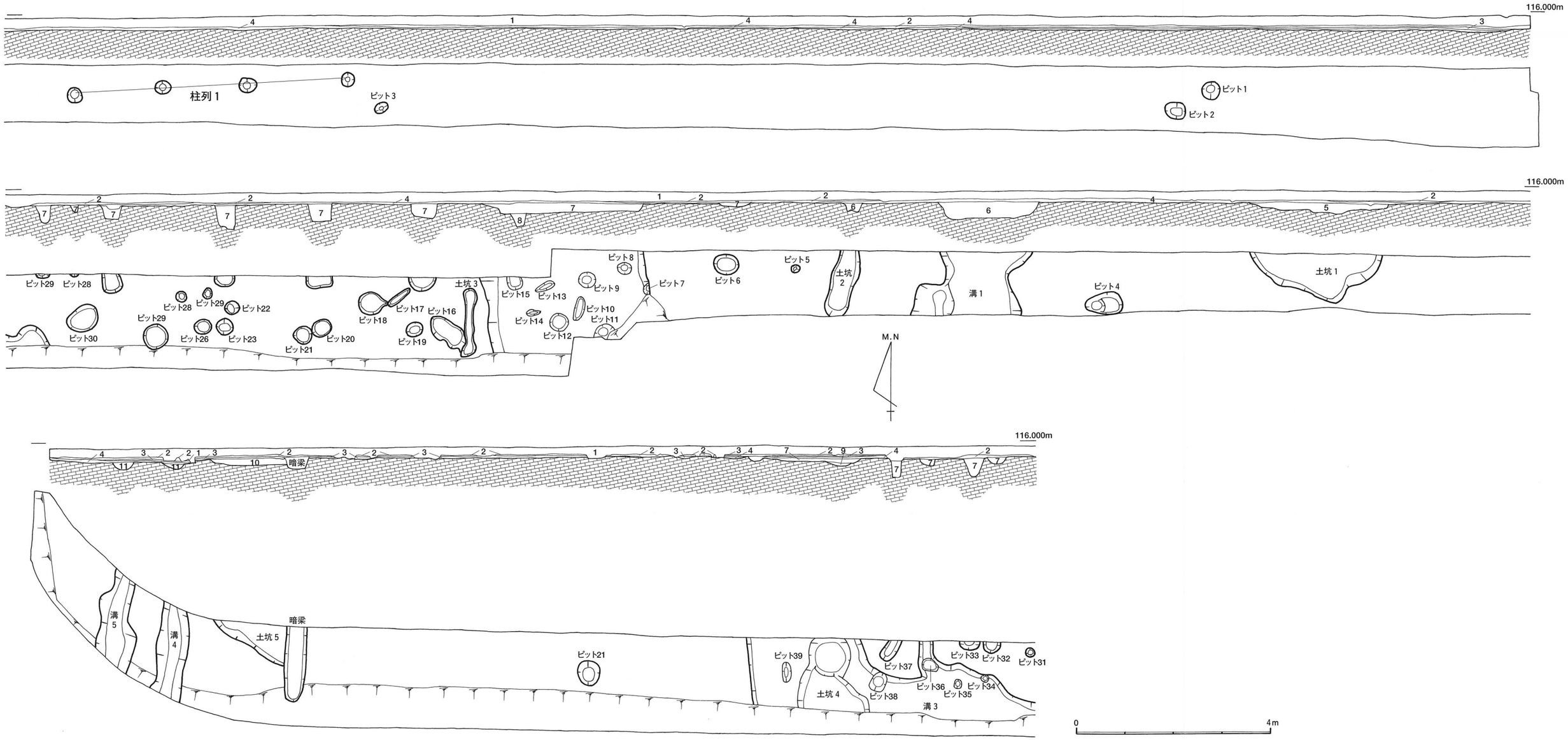
Ⅳ区

溝7

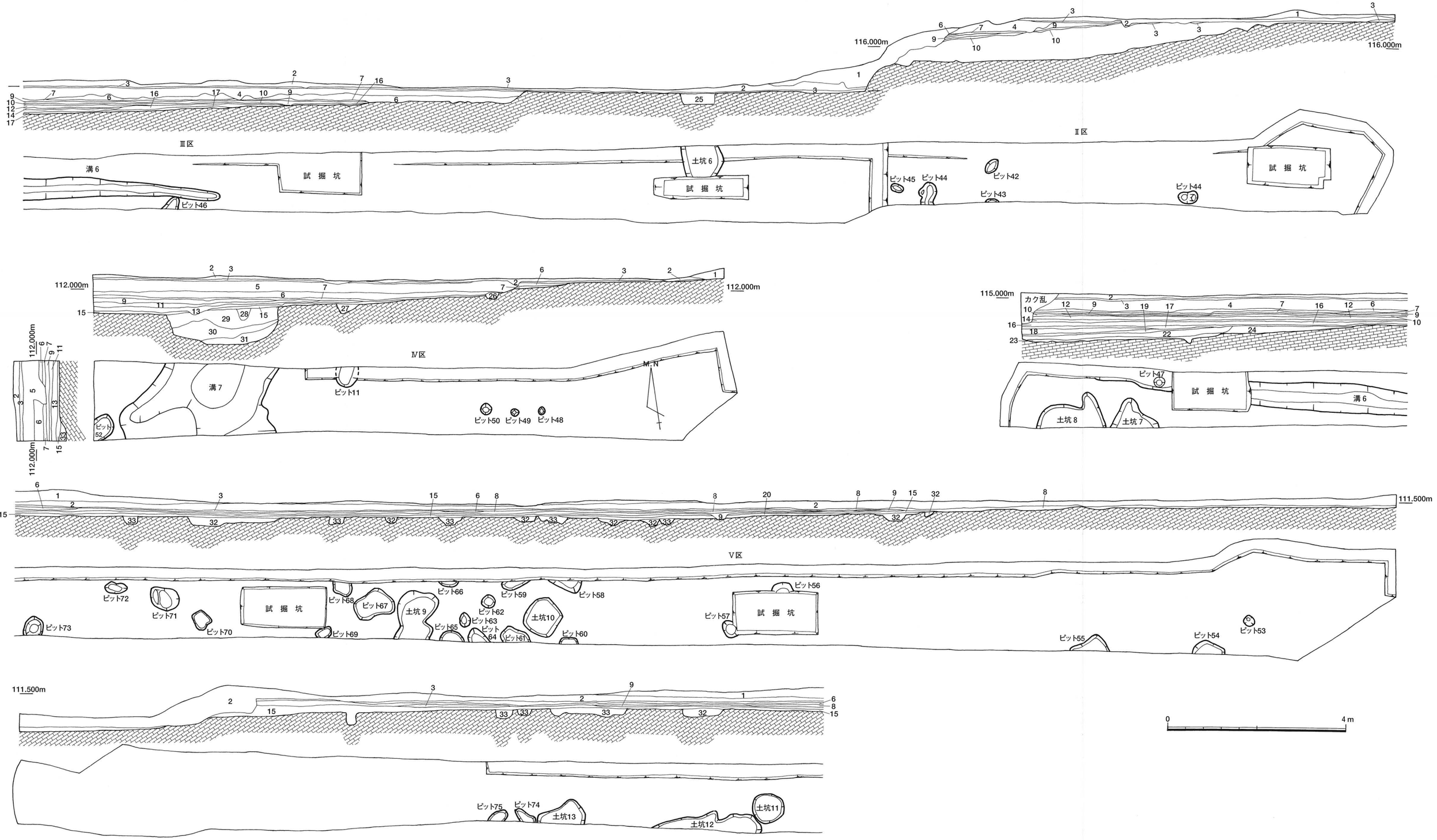
調査区西側で検出した南北方向の溝で、幅が1.55mある。深さは0.8mで、底面は南から北へ緩やかに傾斜する。埋土は3層に分けることができ、上から順に第1層・濁褐色粘質土、第2層・濁灰黄褐色砂質土、第3層・暗褐灰色粘質土となる。ただ、第1層と第3層の間で遺物が接合するため、一度に埋まったものと思われる。第3層には炭が混じっている。遺物としては縄文土器と土師器が出土している。

ピット

調査区東端は地山が削平されているため、遺構は確認できない。調査区中央あたりにピットが3つほぼ直線に並んでおり、北壁に同じようなピットが1つ確認でき、柵のようなものが調査区内で折れ曲がっている可能性も考えられるが、調査区の幅が狭いため不明である。


116.000m
柱列1
ピット1
ピット2
ピット3
ピット29
ピット28
ピット30
ピット22
ピット23
ピット26
ピット21
ピット20
ピット19
ピット18
ピット17
ピット16
土坑3
ピット15
ピット13
ピット14
ピット12
ピット10
ピット11
ピット9
ピット8
ピット7
ピット6
ピット5
土坑2
溝1
ピット4
土坑1
M.N
暗梁
溝5
溝4
土坑5
ピット21
ピット39
土坑4
ピット37
ピット38
ピット36
ピット35
ピット34
ピット33
ピット32
ピット31
溝3
0
4m

第3図　Ⅰ区遺構平面図

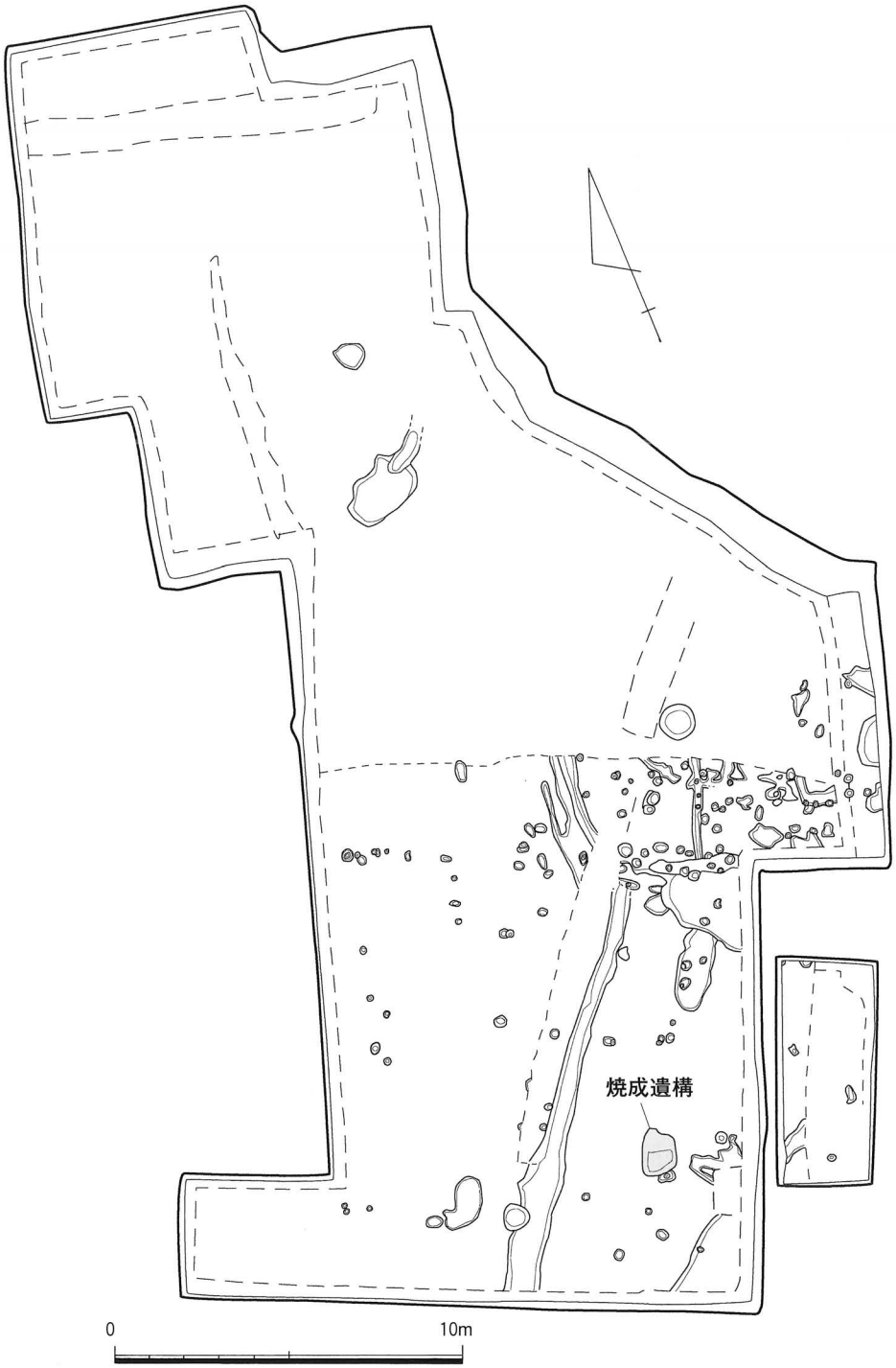


第４図　Ⅱ～Ⅴ区遺構平面図

Ⅴ区

遺構は調査区のほぼ中央に集中し、西側になるにつれ希薄になる。埋土は２種類あるが、埋土の種類と遺構の集中の仕方に特に規則性はない。遺構同士の切り合い関係はないが、Ⅳ区の遺構に同様の埋土があり、その切り合い関係から考えると、黒褐灰色粘質土より新しい遺構の埋土と考えられる。この調査区で検出した土坑11・土坑12の埋土中には、炭化物や焼土塊が多量に混入していた。

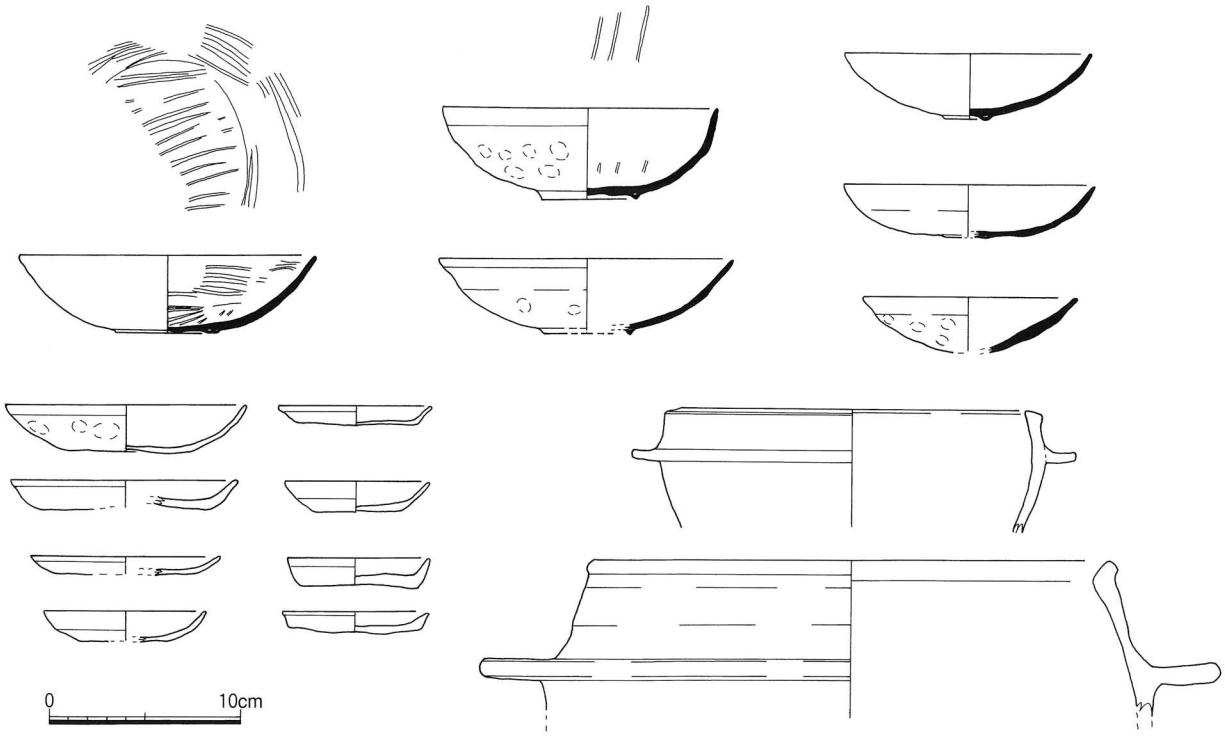
Ⅵ　焼成遺構（第５・６図）



第５図　錦聖遺跡平面図

本調査地のⅢ区の土坑７・８とⅤ区の土坑11・土坑12の埋土中には、炭化物や焼土塊が多量に含まれていた。いずれも平面は不定形であるが概ね隅丸方形状を呈しており、焼成遺構と考えられる。出土した遺物は砕片であるため、詳細な時期や焼成した遺物の特定は困難な状況であるが、他の遺構埋土の観察や出土した遺物から中世前半期の所産であると考えられる。

93年度に行われた錦聖遺跡の調査では、今次調査区の遺構と類似する焼成遺構が検出されている。錦聖遺跡は、石川西岸の中位段丘上に位置する。主に13世紀中葉から14世紀前半頃、和泉型瓦器椀Ⅳ－１～３期までが出土し、焼成遺構の他、区画溝などが検出されている。遺構の壁はコの



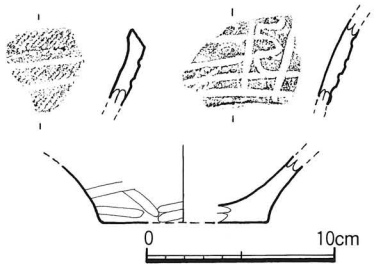
第６図　錦聖遺跡出土遺物

字状に被熱しており、焼成遺構底面には埋土中には多量の炭化物が混入している。またこの壁面に残る焼土塊の中には、数点土師器皿が検出されており土師器の焼成窯の可能性も考えられるが、埋土中より、瓦器片もみられ、限定はできない。

いずれの遺構も、遺構内に未製品や破損品と思われるような遺物の出土はなく、大阪府堺市平井遺跡の瓦器焼成窯の遺物出土状況とは異なる。しかし、窯の規模などは類似する点が多く、小地域範囲あるいは集落内への供給を目的とした簡易的な窯であるとの想定も可能であろう。

Ⅶ　出土遺物（第７・８・９図）

今回の調査で出土した遺物は、整理箱４箱で、調査面積から考えると少ないと言える。調査区ごとにみると、Ⅰ区からの出土遺物が最も多く、出土遺物全体の半分以上を占めている。遺構から出土する遺物については、溝２を除くとそのほとんどが細片で、器種を特定することができないものが多い。以下､図化できたものについて述べていく。



第７図　縄文土器

縄文土器

今回の出土遺物の特徴として、縄文土器が出土していることが挙げられる。出土しているのはⅠ区・Ⅳ区・Ⅴ区で、遺構だけではなく耕作土からも出土している。量としては細片ばかりが約30点と少ない。

（１）は、溝１から出土した深鉢の口縁である。胎土に

は細かい砂粒が多く含まれている。口縁端部は外傾しており、細かいLRの縄文が施されている。口縁部には、端部からやや下がったところに２条の沈線が施され、沈線より下には口縁端部と同じような細かいLRの縄文が施されている。口縁内面は強いヨコナデによって成形されている。溝１からはこれ以外に細片が数点出土しているが、いずれも縄文土器であり、この遺構については縄文時代のものと考えられる。

（２）・（３）は溝７から出土している。（２）は体部片で、外面には横方向の直線→縦方向の波状文→縦方向の直線の順で沈線が施されている。また、左下の部分には縄文原体を押し付けたような痕跡がかすかに残っている。（３）の底部は平底で、外面には太いヘラミガキが施されている。溝７から出土している遺物はこの他に土師器が含まれている。溝７から出土している遺物はこの他に土師器が含まれている。

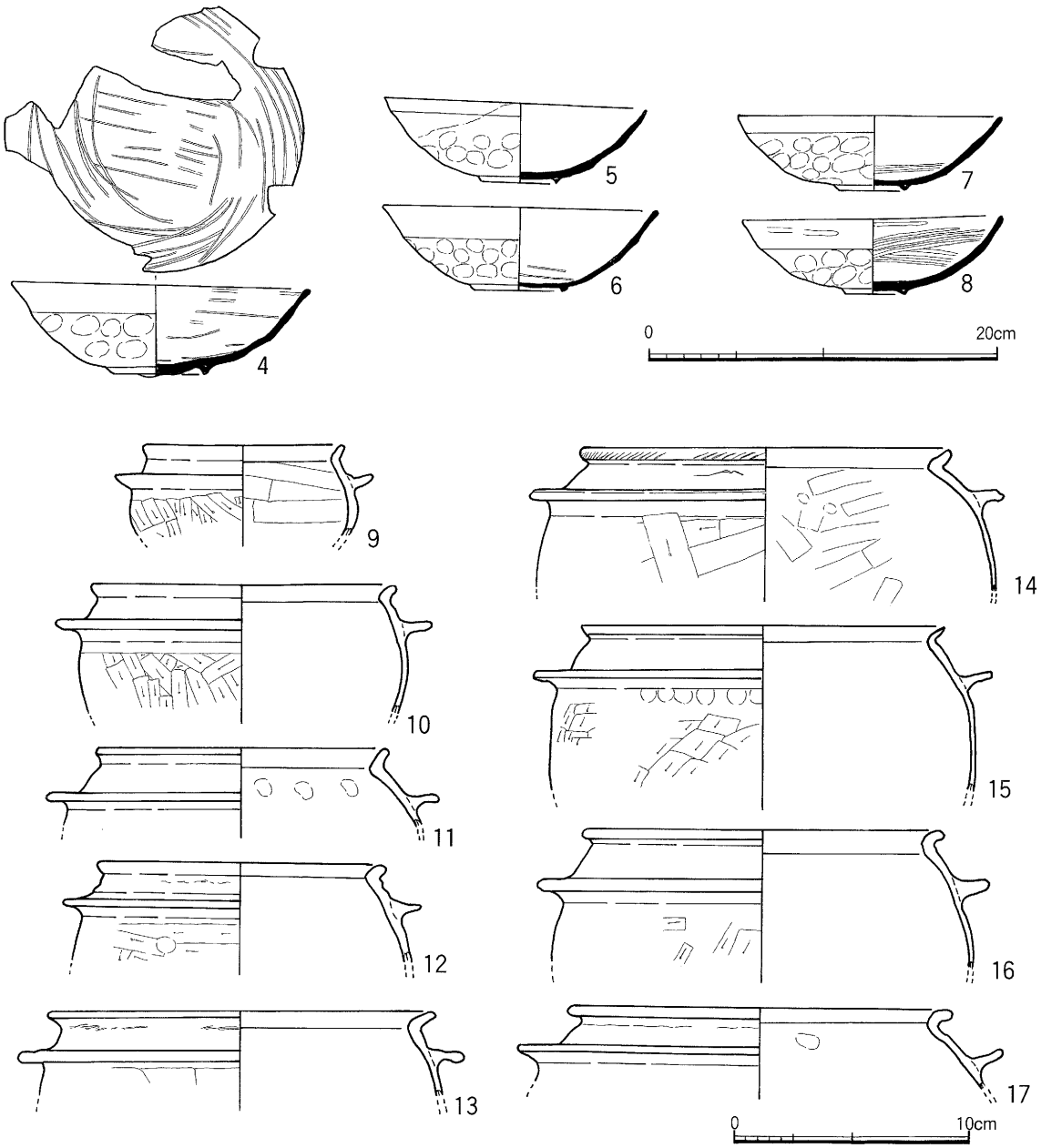
中世の遺物

遺構から出土した遺物の中で最も多いのが中世の遺物である。その中でも溝２からは比較的まとまって出土している。溝２から出土した遺物を第８図に示す。

瓦器椀は５点出土しており、体部外面は指頭痕が明瞭に残っている。（４）はこの中で法量が最も大きいもので、口径17cm、器高5.3cmを測る。外面にヘラミガキが見られず、高台が外側に踏ん張らずに、逆三角形状になり形骸化の傾向が見られることから、尾上編年のⅢ－１段階のものと考えられる。内面には平行線状の暗文が見られる。（５）～（８）もほぼ同様の法量を示しており、いずれもⅢ－１段階に相当するものであろう。なお、５の体部には右上がりの粘土接合の痕跡が見られる。

土師質土器は、羽釜が出土している。図化できたのは９点であるが、他にも数点出土している。口径から小（９）・中（10～12）・大（13～17）の３種類に分けることができる。いずれの大きさのものも、短く外反する口縁を持ち、体部外面を板状工具によって削られている点で共通している。(11) と (14) を除いて体部外面や鍔下面、口縁端部に煤が付着しており、実際に使用されたものを破棄したことがわかる。(12) ・ (14) ・ (17) の頚部外面には粘土の接合痕が残る。
（９）は鍔が水平よりやや上向きにつき、体部内面には板状工具によるケズリの痕跡が見られる。ケズリの方向については、その後にナデを行っているようで確認できない。(11) で鍔がはずれている部分があり、この部分には横方向のケズリが確認でき、体部を削った後に唾を接合していることが分かる。(12) は口縁が他のものよりさらに短くなり厚めである。口縁が玉縁状になる過渡期的な形状なのかもしれない。(13) の口縁下部から屈曲部にかけての部分はヘラ状工具によってひっかいたようになっている。間隔、長さに規則性はない。(14) の口縁端部には板状工具による浅い刻み目が確認でき、鍔の端部にはヨコナデによって上部に窪みが沈線状にめぐる。(15) の口縁は、一度口縁を成形した後に端部をやや内側に起こすようにもう一度ヨコナデによって形を整えているため、他のものに比べて端部が薄く鋭角的になる。また、鍔の下には接合時の指頭圧痕が残る。

溝２以外から出土した中世の遺物について第９図に図化した。図化できたものはすべてⅠ区の遺構から出土したものである。

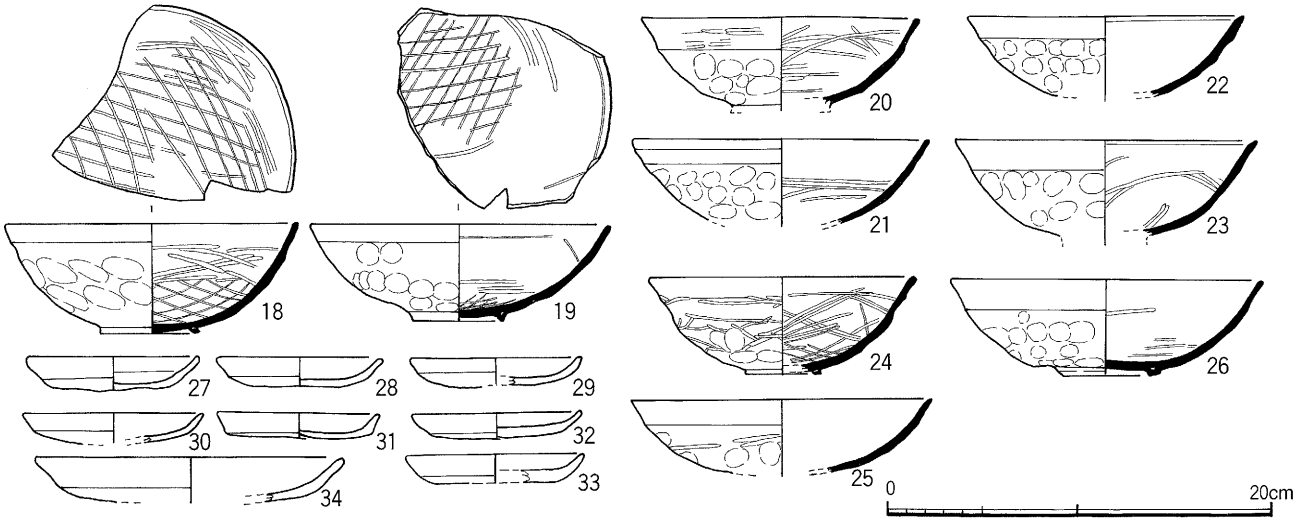


第８図　溝１出土遺物

（18）～（21）・（27）・（30）は、ピット23から出土した遺物である。（27）、（30）は土師器の小皿である。（27）は、口径8.8cm器高1.9cmを測る。底部から内傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。（18）～（21）は、瓦器椀である。いずれも、口径約15cm前後、器高５cm前後であり、外面にヘラミガキがなく、高台も逆三角形状のものが多く見られる。これらの状況から、尾上編年Ⅱ－３期～Ⅲ－１期のものと考えられる。（18）と（19）の見込み部には斜格子状の暗文が確認できる。なお、（18）の高台は他のものよりも高台が外側に踏ん張る形状になり、器高も高い。これらの中では古い様相を示すものである。

（22）はピット19から（23）はピット33から（26）はピット38から出土した瓦器椀である。（26）の見込み部には平行線状を施した暗文が確認できる。尾上編年Ⅲ－１期に相当するものと考えられる。

（28）はピット25から、（29）、（32）は溝５から出土した土師器の小皿である。いずれも口縁を



第９図　出土遺物

ヨコナデ成形し、底部に指頭圧痕が残る。

（24）・（25）・（31）・（33）・（34）は土坑４から出土した遺物である。（31）は口縁がほぼ垂直に立ち上がり、底部は指頭圧痕による凹凸がなく、他の土師器小皿とは異なる様相を示す。

（24）、（25）は瓦器椀で、尾上編年のⅢ－Ⅰ期に相当するものと思われる。（24）の見込み部には斜格子状の暗文が確認できる。

Ⅷ　ま　と　め

今回の調査は甘南備遺跡のほぼ中央を東西に横断するように行われ、柱列などの遺構を確認したが、その分布は一様ではない。Ⅰ区・Ⅴ区が平坦地であるのに対し、Ⅱ～Ⅳ区はもともと緩やかな斜面であったことがその原因と思われ、Ⅰ区遺構、遺物ともに最も多く見られる。

遺構の時期については、Ⅰ区中央の東よりで検出した溝１とその周辺の遺構から縄文土器が出土している。時期は、出土した土器から縄文時代中期後半から後期初頭であると考えられる。また、中世遺構の埋土や耕土からも縄文土器や石鏃が出土している。こられの状況から遺構の広がりとしては限られた範囲であるが、Ⅰ区の平坦面に縄文時代の集落が存在していたと考えられる。

中世の遺構については、各遺構の切り合い状況から少なくとも２時期の存在が考えられるが、溝２から出土した瓦器椀は、尾上編年Ⅱ期後半からⅢ期前半代の範疇のもので、12世紀中半頃にあたる。溝２や溝３の底面で検出したピットや土坑からも瓦器椀が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。これらの状況から、各遺構の切り合いは、それほどの時間差はないものと考えられる。また、Ⅱ～Ⅴ区上層の耕土からも概ねこの時期の遺物が出土している。

今回の調査区では、12世紀中半頃を中心とした集落が展開していた事、また、その集落はそれ以後、継続して営まれていない状況が窺える。ただし、調査区の範囲が東西に長く南北幅が狭いことなどから、集落の全容を把握するには至っておらず、集落の様相や焼成遺構の性格については、今後の調査に期待したい。

報告書抄録

ふりがな	かんなびいせき
書名	甘南備遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	富田林市遺跡調査報告
シリーズ番号	4
編著書名	平方扶左子
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584－8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721－25－1000
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
甘南備遺跡 (かんなびいせき)	富田林市 (とんだばやし)	27214	86	34° 27′ 11″	135° 36′ 22″	1996. 11.13～ 1997. 3.31	2137m²	歩道設置に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甘南備遺跡	集落跡	縄文～ 中世	ピット 溝 土坑 溝	縄文土器 土師器 瓦器	焼土坑を検出

甘南備遺跡

発行年月日　1997年３月31日
編集・発行　富田林市遺跡調査会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

1997．300